

<2022年度 第4回定例研究会／ハイブリッド開催>

「おもやい」から考える社会福祉

—被災・復興・地域づくり—

講演：鈴木 隆太（一般社団法人おもやい 代表理事）

日 時：2022年11月26日（土）18時～19時30分

1. 研究会の概要と鈴木隆太氏

2022年度第3回定例研究会は、「『おもやい』から考える社会福祉—被災・支援・幸せ—」と題し、佐賀県武雄市から一般社団法人「おもやい」代表の鈴木隆太氏をお招きした。

鈴木氏と筆者とは、2016年に発生した熊本地震以来のお付き合いである。筆者は震度7に見舞われた熊本県西原村在住であり、その際に西原村災害ボランティアセンターの統括役を担った。西原村には本当にたくさんの方々が支援に駆けつけてくださったが、鈴木氏はそんな「支援者」の一人だった。

熊本地震のような大災害は、被災地域に「見えない」状況をつくり出す。「死者〇〇人、全壊家屋〇〇戸」というような全体をまるめた情報の影に、被災者個別の状況が埋もれていく。例えば、避難所からまとまった数の人びとが自宅に戻ったからといって、それは必ずしも「被災状況が落ち着いた」「復旧が進んだ」とは限らない。なぜなら、自宅の応急危険度判定が「赤」（危険）であっても、また断水していても、避難所生活での気疲れなどを理由にして自宅での生活に戻った人たちもいたからだ。そういう人びとの存在は、被災地全体を漫然と眺めるだけでは「見えない」ままであり、また「見えない」ままであれば「支援」の手も届かない。鈴木氏は、そのような「見えない」状況にある人びとへの対応を、ボランティアの仲間たちと共に西原村で長く続けてくださった。西原村の災害対応において、鈴木氏はとても大きな存在だったのだ。

現在47歳の鈴木氏は、熊本地震よりずっと前の10代の頃から、国内外の様々な被災地で「支援」に携わり続けてきた。そして現在では、地元の武雄市で一般社団法人「おもやい」を立ち上げ、災害発生時のみならず平時も含めた幅広い「支援」活動を展開している。今回の研究会では、このような鈴木隆太氏の半生と「おもやい」の活動に接しながら、あらためて「社会福祉」について問い直すことを目的とした。会は3部構成とし、まず「第1部」として鈴木氏の紹介と研究会の趣旨について筆者から説明を行い、次に「第2部」として鈴木氏から「おもやい」の概要について紹介を受け、続いて「第3部」として「被災・支援・幸せ」をテーマとする鈴木氏と筆者の対談を行った。

本稿では、この研究会で語られた鈴木氏の半生について、「支援」活動を軸に整理する。本研究会の趣旨に沿って、読者諸氏における「社会福祉」の問い直しに資するものとなれば幸いである。なお、

以下の斜体部分は鈴木氏による語りの引用であり、語りの中の括弧部分は筆者による補足である。

2. 鈴木氏の半生と「支援」

鈴木氏は愛知県名古屋で生まれ育った。阪神・淡路大震災が発生した1995年当時、鈴木氏は受験生だった。

阪神・淡路大震災の時、19歳。私は浪人生をしていました。もともと東京の方の大学に行こうと思っていたんですが、関西方面に変えました。受験に行って、帰りにボランティアして帰るみたいなことを、何度かやっていました。

(その頃に出会った被災者に)脳性麻痺の人がいて、小学校のグラウンドの体育器具倉庫とフェンスの金網の隙間にブルーシートで屋根をつくって避難生活をしていました。なぜ避難所に入らないのかと聞いてみたら、トイレに誰かの介助が必要だし、車いすで避難所に入ると迷惑がかかるから、と言われました。

(その脳性麻痺の被災者に)初めて会ったときに、すごく申し訳なさそうに「ちょっとトイレの手伝いしてもらっていいやろか」と言われました。トイレは(誰しもある)生理現象なのに、それを人に謝りながらしないといけないということが、すごく納得がいきませんでした。

神戸の避難所で、社会の課題を生で見るということが立って続けにありました。障害者のこととか、被差別部落の人たちと他の人たちとの軋轢とか。ここに自分がいてできることって何かわからないけど、少なくとも、これから自分が生きていく上でここにいる人たちから教えてもらうことってめちゃくちゃあるんじゃないだろうか。実際に起きていることとか、目の前にいる人たちが抱えているお悩みみたいなことを聞くにつれて見るにつれて、何か手伝うことができないかなということ、(活動に)携わるようになりました。

避難所でも課題があり、仮設住宅でも課題があり、そういうことが次から次から起きてきたという状況の中で、そこで自分ができうる限り、少なくとも自分がつながった人たちに対して、自分ができることはないかと、ひたすら続けてきたのが、阪神・淡路大震災のはじめの頃の自分でした。

鈴木氏は大学への進学をやめ、「被災地 NGO 協働センター」の立ち上げにも関わりながら、神戸で被災者への支援活動を続けていた。

その中で、中越地震が2004年に発生する。

その時は既に結婚していたので、ゆくゆくは佐賀に行くってということがその時点で決まっていました。私はずっとシティボーイ(笑)だったので、佐賀の(住むことになる地域が)田舎ということで、それまでの暮らしが大きく変わるというところで、中越地震が起きて、「神戸の教訓を中越につたえよう」ということで、私は被災地 NGO 協働センターから中越に派遣されました。

いざ行ってみると、中越の人たちから学ぶものがめちゃくちゃあって、ずっと都市に住んできた私が、中山間地で力強く生きている人たちの生き様に対して、率直に「知りたい」「学びたい」という

気持ちになって、中越で5年ほど活動しました。集落を回って、その集落でこれからどうやっていくのかという、今で言う「地域おこし協力隊」のようなことをやりました。それが、もうひとつの自分の原点になっています。

その後鈴木氏は、妻の実家である佐賀県武雄市の寺で僧侶となったが、2015年の熊本地震発生を機に、被災地 NGO 協働センターのスタッフに復帰する。その際に、西原村に来てくださったことは先に述べたとおりであるが、熊本地震における鈴木氏の「見えない」被災者に対する関わり方は、ここまで語られたような経験と内省に裏打ちされたものだったことがわかる。

そして、鈴木氏の今の地元である武雄市で、2019年・2021年に大水害が発生した。

令和元年に水害で被災した。同じ人たちが令和3年に水害で被災している。短期間で立て続けに2回。令和4年の被災では全部新品。「令和元年で被災して、全部張り替えて、やっとこさ家も直って、住んで1年経つか経たないくらいでまた水害が起きて、全部破棄をしなければならない」という状況が発生しました。

最初（令和元年）の活動は、いわゆる片付けとか掃除とかから活動をスタートさせつつ、地元で活動を始めたので、中途半端なことではできないということをすごく感じました。また、地元が被災をすると、どちらかという「来てくれてありがとう」という側になりました。「じゃあ、今まで外で支援をしていたときの自分の思いというか立ち位置はどんなやつたんやろうな」って、地元が被災をするということを通して、自分自身の中でも問い直しみたいなことが生まれました。

そういう意味では、自分は今まで被災をされている方々の気持ちってちゃんとわかってなかったんじゃないか、（被災地で支援活動を行う）自分は横柄な態度だったんじゃないか、という気持ちがあります。

最近、「支援」という言葉を（自分は）使えなくなった。「お手伝い」とか「おせっかい」とかいう言い方をするようになりました。行政・福祉行政が使う言葉の「支援」の先には「自立」がある。だけど、私たちは（被災者に）「自立」を促したいわけではない。いっしょに暮らしていきたいだけです。安心して暮らしていける状況をつくるのが、我々がやっていく役割だなと思うので、「支援」という言葉は使わなくなりました。なので最近、行政の「支援」と私たちの活動が噛み合わないなあと感じているところです。

「おもやい」でデイサービスをやっています。災害から1年、2年、3年と経っていく中で、「近所のおばちゃんが少し心配な状況になってきた」というようなことになってきた時に、顔も知っているし、「おもやい」に遊びに来てくれたらいいなあとと思って、それをじゃあ事業にしようか、「介護福祉事業」なのかなあと思ったりするけど、そうなっていくと、事業自体をやっていくことが目的化していくのもちょっと違うなあと悩んでいるところでもあります。

それに、携わっている我々スタッフも同じ地域住民。「私にとって"地域にこういうものがあつたらいいなあ"ということをやっといこうね（という話を「おもやい」の中でしている）。「誰かのため」

かもしれないけど、「自分のため」でもあるなあと。

3. 「社会福祉」を問い直す

鈴木氏は、常に悩みながら「支援」を続けてきた。現在の「おもやい」に至り、(事業や理念ありきではなく)まず課題をかかえる(行政からは「見えない」)人びとがいて、その人びとに対する『自立』を促したいわけではない。いっしょに暮らしていきたいだけ」という思いから具体的な事業へとつなげていく活動を展開する中で、「支援」ではなく、「おせっかい」「お手伝い」という言葉を使うようになったという。

先に述べたとおり、鈴木氏の半生と「おもやい」の活動を通して、あらためて「社会福祉」を考える機会とすることを本研究会での目的とした。今回鈴木氏から語られた思いや活動内容は、まさに「社会福祉」の本質に通じるもの、現在の「社会福祉」の有り様に一石を投じるものなのではないか。読者諸氏はどのようにお感じになっただろうか。

鈴木氏には、多方面にわたる活動でお忙しい中(研究会当日も、午前4時に佐賀を出て、宮崎県都城で2022年9月に発生した台風災害の被災者に向けた炊き出しを実施してからの来熊だった)、熊本学園大学までご足労いただき、筆者の不躰な質問にも嫌な顔ひとつせずにお答えくださった。末筆ながらあらためて鈴木隆太氏に御礼申し上げたい。

隆太さん、ありがとう。

(研究会報告担当者：藤本延啓)